

---

# World Revolution!

澄江春樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

World Revolution!

### 【NZコード】

N9177Z

### 【作者名】

澄江春樹

### 【あらすじ】

世界革命 というモンスターが世界各地に住みつく事件が起きて、約十年。ぐーたらゲーマー主人公・天江一稀は岩崎奏という女子と会って、その真実に少しづつ近づいていく。  
という物語を創っていきたいです。初投稿です。なので文章が見苦しいものになるかと思いますが、とにかく直していきます。

## プロローグ（前書き）

初めまして澄江です。

初投稿なので見苦しい文章ですが、よろしくお願いします。

## プロローグ

世界は変わった。

悪い意味ではない。いい意味だ。

都市部には最新式の高層ビルが建ち並び、最新技術を使った電光板などがいくつもある。都市部でなくとも明らかな科学の進歩のしるしがあり、それは見ている者の目に華々しい印象を与えた。といつても進歩が急激すぎて一般家庭には普及してないのが現状なのが。

科学が急激な進歩を遂げたとき、確かに何かが起こつたのは事実だ。ただその原因が分からぬ。その疑問を学者、研究者がこぞつて調べたのだが、結局核心にたどり着くことはできなかつた。

世界革命。あやふやなそれは誰が言い出したのかも分からぬが、いつの間にかそんな名前になつていた。

だが、科学の発展は同時に災厄を世界にもたらした。  
人間を食い散らかす化け物、俗に言つモンスターが人の住まない地域、通称「ゾーン」に徘徊するようになつたのだ。

一体どこから湧いてでてくるのか。どうしてモンスターが湧くのか。それらの疑問一つ、まだ人類は分かつていない。人類にとつて運がよかつたのはモンスター達が生息地を持っていたことだ。おかげで人間は絶滅せずにすみ、住む場所を追われてなお生き残つた人

間が作つた一大都市、それがここ、遙坂市だ。

日に日に進む科学技術の進歩は軍事力にも影響して、やがて撃退とまではいかないが、国民の安全を守るまでに治安は回復された。今では居住区にモンスターが進入するのを阻止するまでだ。それでも突然変異を起こした「変異種」が包囲網を破り、街中に進入するという事件や今までなりを潜めていたモンスターが進入する事件が今でも多々ある。後者は特に厄介で、犠牲の数が大きい。

今説明したように、世界は変わった。

これは紛れもない事実だ。

世間は今でもそう言っている。

俺 天江一稀も世界の移り変わりをいいことだと割り切つて特に気にせず生きていた。

だが、ある人物によつてその生活は180度変わることとなつた。

俺の人生は

岩崎奏との出会いによつて一変した。

「ふー、ねむ . . . . .」  
時計を見る。針が指している時間はまだ学校に行くにはほど遠い時間だ。

「よし、もう一度だ . . . . . おやすみ . . . . .」  
ベッドに潜り込み、寝息を立て始める。昨夜、夜通しでゲームをしていたのだ。さすがに眠い。

眠りに体を任せて数分、ドタドタと階段を駆け上つてくる音が聞こえる。

「こらーっ！ 天江家の朝は早いんだから起きて。兄さん」

我が家の中、夏穂の高い声が耳に聞こえてきた。

「そんなかたいこと言ひつなよ。頼むから兄にあと五分だけでいいから寝させてくれ」

「ほんとに兄さんはダメなんだから。 もう、一人で起きてよね、兄さん」

別に一人で起きれないわけではない。横に転がっている田原まし時計をかけていないだけだ。それに

「知つてるか？ 世間では妹に起こされるなんて貴重なシチュエーションらしいぞ？」

「確かにそうかもね。 . . . . . バカ言つてる暇があつたら着替えて朝ご飯早く食べちゃつてよ」

だがそんな俺の言葉をバカと言つて夏穂はまた下へと降りていった。

「バカはないだろ、つたく」

頭をかきながら寝間着から制服に着替え、妹に言われた通りに下へ下りる。

少しロングな髪。せつときは仏頂面を浮かべてはいたけど、素では整った顔。淡い膨らみをもつた一つの双丘。それでいてモテルでもなれそくなほど整った体型。せつとあのじつかり者は男子にこそむかし人気なのだろう。

兄に対する仏頂面さえなければ俺も可愛いくと思つんだけどなあ。

「はよー」

ドアを開け、見えてきたのは夏穂のソファーに座りながらテレビを見ている姿、そしてテーブルの上に見える美味しそうな朝食。こういった光景にはなにか感慨深いものを覚える。

「あれ・・・？」母さんが消えた

朝、いつもキッチンに立っている母さんの姿が見えない。どうしたのだろう。

空を切った挨拶の代わりに夏穂はソファーにあぐを乗せて俺に呆れたように言った。

「一昨日から母さんは旅行でしょ？　ていうか昨日も同じこと言つたんだけど」

「ああー、そういうえば

俺たちの母は今回のよう一度々旅行に行く。

家を出る前日、リビングの隅に荷物があると思つたら翌日には、

『ひみつと母さん遠いところ用事があるから家空けるね！ 行つてきまーす！』

と書かれた書き置きを残して消えている。消えたら最後、一ヶ月

以上帰つてこない母さんは今も旅に出る理由を教えてくれない。

「いつも思うんだけどなんで旅行に行くんだろうね？ どこへ行くかも教えてくれないし」

兄さんもそのことを考えているんだ、妹よ。

「さあなあ。案外父さんにでも会いに行つてるんじゃないの？」  
父は元々海外に単身赴任をしている身なのでほとんど家に帰つてこない。

「それじゃ教えない理由になつてないでしょ。 って卑くご

飯食べちゃつてよね」

「はいはい」

そこからなんびりと朝食を食べた俺は支度を整えて妹より一足早く家を出て、俺と夏穂の通う朝椿高校に向かつた。

「よつす、一稀！」

いつも学生で賑わつている朝の口差しが眩しい大きな通りを歩いていると、後ろから見知った人物の声がかかつってきた。

「あー。朝からお前は元気だな」

顔を横に向けて横目でそいつを見る。相変わらず顔立ちは整っていて、眼鏡と黒色をメインにしている学園の制服は、その細身の身体によく似合つている。

「そういうお前は逆に眠たそうだな」

呆れたように笑つてゐる顔は妙に憎たらしく思える。

「しようがないだろ・・・・・・・・ 昨夜は夜通しひずつヒゲ

ームしてたんだから」

山場に入つてしまつたからつい熱中してしまつた。

「ふーん。 つてえことは一稀、お前今日提出の筆記課題

忘れてるだろ?』

「…………え? 課題がある?」

『おいおい…………嘘だろ…………』

『なら一ついいことを教えてあげようじゃないか。』

今日

の課題提出先は、あの『醤油』だ』

その言葉を聞いた瞬間、俺の顔は真っ青になつた。

本名、阿野勇作。校内でのあだ名は「醤油」。一見あだ名を聞いただけだと恐怖などまるで感じない、むしろ可愛いと思うのだが現実は逆だ。課題を忘れたらノイローゼになるほど怒る恐怖の塊だ。そのお茶目な名前の由来は、いつも弁当に醤油を入れてくるかららしい。

身体からは冷や汗が滝のように流れ出ている。脱水症状が起きてしまいそうだ。

「…………及川。いや、及川遙斗様。俺からの一生に一度のお願いだ。課題を見せてくれ」

『俺はその一生の一度の願いを通算17回聞き入れてるんだけどな…………』

今回もかよ、と言いたそうな口調だが、それとは裏腹に表情には微笑が浮かんでいる。

『ま、いいけど。その代わりちょっと放課後付き合ひへんない?』

しうずめ提出の課題を忘れて地獄を見るか、放課後友人の用事に付き合うか。そんなの天秤に掛けるまでもない。

王から命令を受けた従者のように身体を下に落とし、片足を立てて俺は即答した。

『喜んでお供しましょつ』

## Episode 1 (後書き)

感想を頂ければ嬉しいです

窓から日光が差し、いつも以上に暑い教室。

そここの教室の隅、黙々と課題を写している生徒が一人。

「ぐおお、お、終わらねー．．．．．」

周りのクラメイトが疑うような視線を送つてくるが、今の俺にはそんなの関係ない。

俺はひたすら課題とこりめつこしあつていた．．．．．。

無事提出して、難を逃れた俺は24時間耐久で日差しを受け続けていたゾンビばりにうなだれていた。

「くそ、まさか課題の量がここまで多いとは．．．．．」  
課題を出した鬼教師を心の底から呪つていると、見知った人物から声がかかつってきた。

「あんたが家で課題をしてこないからいけないのよ」

少し呆れているような高い声。その声がした方向に俺は目をやつた。

「おお．．．．．楓か」

そう返した俺を、からかい口調でさらりに責め立てる。

「あはは、どうせゲームでもやつてたんじゃない？ ビツ？ 図星でしょ？」

「ぐ．．．．．ああ、そつせ、そつだよ」

当てられたことに少し悔しかつたが、渋々うなづく。

「そんなことじゅう今日の授業どうすんのよ。保健室いった方がいいんじゃないの？」

「心配ない。授業は受けるさ」

「あつそ。ま、倒れても知らないけどね」

そういうつて楓は自分の席に荷物を置いた。ちなみにその席とは俺の隣だ。

「それよりお前だつて最近貧血氣味とか言つてんだから、自分の心配しとけよ」

俺はからかうように言つてやつた。

「なつ・・・うるさいわよ」

そう言つた楓の顔には少し赤みがかかつっていた。

少し黒色のかかつた金髪のポニー テール。それなりに整つた品性のある顔。体型は他の女子と同じように若干細いくらい。なにより印象づけるのは幾何学模様の刻まれた両腕のバンド。

そんな女子、岩倉楓は男子の人気ランキング五指の中に入る猛者だ。告白された数は数知れず。このクラスにも勇気を出して告白したが、あっけなく散つていつたやつが五人程いたはずだ。

「それでもないぞ。これでも付き合いが長いんだ。多少は心配

」

「あ、そうだ、今日の放課後空いてる？」

「・・・・・　おい。どうしてそんな」

「いいじゃない、別に。理由は特にないわ」

「んーと今日は・・・・・・」

そういうえは今日は遙斗の用事に付き合つんだつたかな。一応地獄を見るはずだつたのだから断るわけにもいかない。

「今日はダメだな」

「え？ 珍しいわね。万年ゲーム廃人。暇人のあんたが？」

「悪い、今日の放課後は遙斗の用事に付き合つんだ」

「ふーん。ならそれ、私も付き合つていい？」

「それは遙斗に聞いてくれ」

どこに行くかはあいつしか知らないからな。それにこれでもし行く場所が『エロゲーショップ』とかだったらシャレにならない。

「じゃあ、ほら、あんたも1限目の準備しないと」

その言葉を聞いて俺は周囲を見渡した。確かに大勢のクラスメイトが次の授業に向けて準備している。

「じゃ、放課後の話、後でね」

「ああ」

放課後。

クラスの違う遥斗に会流して、楓も、ということを伝えたところOKをもらえたので、学校から未だ名前も知らない目的地に直行している。

煌びやかな居住区を抜けて、いかにもモンスターが横から飛び出してきそうな荒れ地を歩いているところで楓から声があつた。

「ねえ、結局行くところってどこの？ 及川」

「ふつふつふ、聞いて驚くなよ。目的地とは『ゾーン』だ！」

それを聞いた途端、楓、俺と顔が歪む。

「おい・・・正気か？」

俺はこの「時世当たり前の質問をぶつける。楓も同じ意見りしへ、「なに考えてんのよ」とつなっている。

だが、俺の問いに遥斗は、即答だった。

「あつたりまえよ」

「おいおい…………用事に付き合つ、じゃすまないっての」  
実際問題、ゾーンには学生では太刀打つできないモンスターがご  
るいりこる。

「んなことこうなつて。好奇心だよ、好奇心

そういう遙斗の手にはいつの間にかカメラが握られている。

「楓、どうする?」

そこで俺は楓に行くかどうかを決めてもらひつとする。

「んー、私も少しばかりはあるけど……………」

「岩倉、ちよつと……………」

遙斗が楓を手招きするように呼び、俺には聞こえない音量で楓に耳打ちする。

瞬間、楓の目が金マークになつた。

「一稀、ゾーンに行くわよー」

「え? おこ、急にビーッしたんだよ

「そんなこといいじゃない。まあ、行くわよー」

その後ろでは遙斗がすすり泣いたような声を出していく。

「少し痛い出費だが…………これもやむをえん!」

「お前あいつに何したんだよ」

少し疑う表情を浮かべた俺は肘で遙斗の肩をこづく。

そんな俺を無視したかのよつて、わざとらしく口笛を吹きながら遙斗は歩きだした。

あつけになつた俺の隣では楓が何やらつぶやいている。

「…………駅前のケーキ食べ放題…………ああ…………

「..

「…………楓…………買収されたのか…………」

「..

ゾーンにつながる道は無限大にある。ただ、ゾーン手前にある柵を越えればいいだけなのだ。

だが、政府の見回りが来るのでタイミングを見計らわなければならぬ。噂によると、見回りに捕まるといひ拷問を受ける、洗脳される、などとろくなことがないらしいので、捕まつたら最期と思つていい。

やつとその入り口まできた俺は昼でも不気味なそれに思わず声をあげていた。

「ここがか . . . .

柵の少し手前には氣味の悪いドクロマークがついた看板があり、ここには化物たちが常に跋扈してゐる、といわれたら思わず納得してしまいそうな、薄暗い印象を放つ森だった。

辺りはすっかり人気がなくなつてゐる。まだ昼だからいゝが、夜になるとさぞかし氣味が悪いだろつ。

「静かに . . . . 見回り、いかが分かるか？」

噂のことを知つてゐるのだろうか。妙に真剣な遥斗が耳を澄ませてこちらにも聞いてくる。

俺もそれにならい、耳を澄ませる。

「 . . . . いないみたいだな」

「そうみたいね」

楓が俺の言葉に相づちを打つ。

「じゃ . . . . 行くぞ」

飛び出して柵まで駆け抜ける遥斗を追つて、俺たちも走つた。

木々が生い茂る森の中を歩いて随分と時間がたつていた。

薄暗い印象は奥に進むにつれて濃くなってきていく。

「なあ・・・・・どこまで歩くんだ?」

さすがにこれが後何十分も続くのはきつい。

「今歩いてるのは、初見じゃ分からぬが実は道なんだ。

ほら、足下見てみな。人の足跡があるだろ?」

「んー? ・・・・・・確かに」

と頷くのは楓。みたところ、少しばてているようにも見える。

「この道は円形状になつててな、要はゾーンを観光するために作られた道なんだよ」

「ふーん。てことは、この道は安全なのよね?」

「まあ基本的にモンスターは襲つてこないさ。・・・・多分だけど」

「た、多分つて何よ···はあ、やつぱつこてこなきやよかつたかも···」

「岩倉は度胸がないなー。一稀、こざつて時はお前が守つてやれよー」

「俺に話を振るなよ···」

「万が一の時はがんばつてよー。じゃないと課題見せてやんないんだから!」

「な、なに!」

おまえは鬼か! だが俺にはまだ生命線である便利屋が

「よしー。俺も岩倉に一票!」

「便利屋、お前まで!」

「便利屋じやねえよ!」

雑談しながら歩いていると森にぽつかりと六が空いたような広い空間に出た。そこの四方にはそれぞれ銅像が置かれている。一つは人間。もう一つはモンスターと分かるのだが後二つが分からぬ。

「ここは . . . . ?」

俺の疑問に遙斗はメガネをクイ、と持ち上げ、自慢げに説明を始めた。

「うおっほん。ここはなんと、あの『血塗られた戦争跡』だ！二人も教科書でなら見たことがありそうだけど . . . . 生で見るのは初めてなのでは！」

急にアナウンサー口調になつた便利屋を放置し、俺と楓は同時に感嘆の声をあげた。

「へえ、ここが . . .

「ここがか . . . . というかなんでお前はそんなに詳しいんだ？」

以前から何かと雑学やらいらない知識を披露していたのだが、こういうことまで詳しいとは。

「俺は以前にもその道の人と来たことがあるからね。当然ここら辺は知り尽くしてるのでこつたよ」

「相変わらずお前の交友関係は幅広いな」

「このつの交友関係は得体が知れない。どこで知り合つのか是非聞いてみたいところだ。

「ふふふ . . . . 」このためにカメラを持ってきたつてもんよー いざつー！」

カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ . . .  
. . .

隣でカメラのシャッター音が無数に聞こえる。

こんな薄気味悪いところを撮りたいなんて変な趣味だなあいつも。

「わ、私も、ちょっと向こうの銅像見てくるわね」

「おい、気をつけろよ」

カメラに夢中の遙斗の代わりに俺が忠告しておく。

「危なくなつたらあんたが助けにくるんだからねー！」

んなもの保障できないってのに。

楓は元々興味があつたのか、早足で銅像の方に向かつていった。

・・・・・ふつ、一人になった、か。特別やることもないし、あの銅像にさほど興味があるわけでもない。あの一人が飽きるまで、俺はリラックスさせてもらうとしよう。

日当たりがいい場所を選んで寝そべる。目を開けると少し曇りがかっている太陽の日が沈んでいくのが見える。鼻に意識を向ければ、森独特の匂いが鼻腔をくすぐり、耳を澄ませば辺りで聞こえてくるのは、今も楽しそうな顔であつちこつちの銅像を行き来している楓と、カメラを持ってかけずり回っている遙斗の足音が一つ。

二つ?

途端に俺の顔が険しくなる。

こちらで聞こえる一人の足音、それに混じつて遠くから静かに響いてくる足音がある。

一、二、三個。

とても小さい音だ。偶然といえどリラックスしていた俺と違つて、興奮しているあいつらには分からぬだらう。そして今もなお、少しずつだがこっちに近づいてきている。

これは十中八九モンスターだ。

そうなると少しヤバい。あいつらは無防備だから遭遇したら確実に殺されてしまう。

まあ、俺は倒せるんだけどね。

あいつらには田頃から色々助けてもらつてゐる。今回はその恩を返すチャンスなんじゃないか。

だが、諸事情でこいつらの前でやるわけにはいかない。てことで今から俺の方が出向いてやることにしておけ。

「やい、遙斗」

「ハア、ハア、なんだい、一稀！」

ちょ、気持ちわるつ！ 興奮するにも程があるだろー！ せつかく腹くくつたのにお前の性で台無しだよ！

「…………俺の膀胱が破裂寸前だからさー、ちょっと向こうの茂みで済ませてくるわ」

その返事を聞かず俺はモンスターがいると思われる茂みに足を向けた。

今にも姿を現しそうな足音に身体を緊張させながら、気配を殺す。

まあ、戻ってきて違和感がない程度に頑張つとくか。



あの二人に気づかれずに敵を倒すにはどうすればいいのだろうか。

無論、一発で倒すのが一番だ。

それは分かつたいたはずなのに . . . . やつちまつた。

走つてモンスターのいるところまでいったのはよかつたんだけど、どうやら見つかってしまったらしい。

足音は極力出さなかつたけど、そのモンスターが犬科だったことが運のツキだつた。

目前にいるのは三体の獵犬。赤い体毛を持ち、飢えた獸のように鋭い目をこちらに向けてくる。

「バウッ！ バウッ！ バウッ！」

俺を囲むようにして威嚇してくる。

一触即発の空気。

先に破つたのは獵犬の方だつた。

「ガウッ！」

横にいた獵犬が土を蹴り、首元に噛みつこうとしてくる。俺は咄嗟に首を横に曲げた。

チツ！

うおっ、危ない！ 首元を掠め、そこから血が流れる。

また膠着状態にはいる。

俺もそろそろ反撃しなければまずい。

風の音がやけに大きく聞こえる。

俺は膠着状態のうちに右手に力を込めた。

右手にどんどん力が溜められていく。

あと、わずか数秒で発動する

はずだったが、そこで膠着状態が無念にもとけてしまった。

タイミングを計ったように獵犬どもが三体同時に襲つてくる。

だが、俺の準備もその瞬間整つた。

俺の右手から炎が生まれる。

瞬時にして右手から身体全体へと広がつていった炎はバリアーのように俺の身体を包み、獵犬から身を守つた。

炎に身体を突っ込んだ獵犬どもは驚いた声をあげるも一寸距離をとり、警戒態勢に入る。どうやら知能は高いようだ。

さつき俺の首を噛もうとした獵犬が頭を狙つて飛び込んでくる。身の程知らずにも程があるぞ。

紅蓮に包まれた右手を一振りするだけで、その姿はあっけなく灰となる。

「キヤ、キヤイン！ キヤイン！」

その光景をみた他の二匹は恐れをなしたのか尻尾を巻いて逃げ帰つていった。

これが俺の力『紅蓮の炎』だ。

「随分と長いトイレなのね、一稀」

「いや、すんませんホント。この通りで『じぞいます楓様』

戻ってきた俺を待ち構えていたのは悪鬼と化した楓だった。

おかしいなあ。俺、君たちを守つたんだよ？ それがどうして土下座しなきやならんのか。だが、どうやらあの戦闘はバレていないらしい。心の中で安堵する。

それほど時間はかからなかつたはずなのだが、どうも気に触つたらしい。楓からはどうす黒いオーラが立ち上つているかのように見える。今にも憤怒の形相で罵倒されそうだ。

「あなたがいなかつた時にモンスターに襲われたらどうすんのよ

「！」

そらあた。

「その時はしようがない。運が悪かったと思つて諦めてくれ」

「約束、してたはずよね」

だから俺その約束守ったんだって。と言いたいけど言つたら姿を隠した意味が無くなってしまうからそこは自重する。

「どうか遥斗に守つてもらつ、じゃダメなのか？」

「え？ いや、そういうじやないけど……よく分かんないけどダメ」

「なんでだよ」

本当意味分からなーい。

帰ろ？」

言つてすぐそのまま出口へ向かっていく。

相変わらずよく分からなーいやつだなあ。

俺も追いかけなきや。

「……………ん？ 遥斗、なにやつてんだ？」

「……………なあ一稀、俺つてそんなに弱く見えるのかなあ……」

楓の「よく分かんないけどダメ」発言は遥斗の心に傷を負わせたようだ。

俺は同情の視線を送つた後、みなかつたことにして楓の後を追つた。

辺りはすっかり夕暮れ時だ。

最初この森に入ったところに戻つてきた。どうやら遥斗の話は本当だったようだ。出口にてた俺は一度後ろを振り返り、その薄気味

悪い森の奥を覗く。やはり吸い込まれるような闇がただ広がるだけだ。

「おい、なにしてんだよー稀。せやべーひらひらー」

少しばかり目を奪われていた俺は、遥斗の声で我に返つた。見ると、楓と遥斗はもう傍にある茂みに身を移していた。

あ、ああ。今行く。

「もう少し見てみたい気もしたが、諦めて茂みに身を移す。

あれから氣を持ち直した遙斗が来るときと同じ真剣な顔をして尋

れでくる

「あ、飛ひ出いは二の切に陳ぐ畢だ」といふたいたな。

よし、行へぞ

ふいに森の中にゴウツと風が突き抜けた。聞こえてきた轟音は、

「丁寧」の意味

楓に手を引かれる。それにつられて俺も走り出した。

荒れ地まで戻ってきたところで遙斗から声がかかつた。

「よし、ここまで来れば大丈夫だろ」

柵を越えてからも走っていた遙斗の歩調がゆっくりになる。

心もそれにしておきたいところだ。だから、たれこれ

あそこを気に入ってるなんて物好きはそうそう

「気味悪いなんていうな！」俺みたいな人種にとつては聖地巡礼

ここにいたか。

さつきの荒れ地とは天国と地獄の差がある華やかな居住区につき一息ついていると、ふいに楓が俺を凝視してきた。

「どうした？ なんか俺についてんのか？」

「いや、そうじゃないけど . . . . 。あなたの裾、なんかついてるわよ？」「

楓の指したところを見ると、裾にさつきの戦闘で流れた俺の血がついていた。

「いや、これは泥だ」

誤魔化せるか . . . . . ?

「ふーん。それにしても今日は汗かいたわ。帰つてシャワー浴びなきや」

誤魔化せたようだ。だが、俺の安心と裏腹に、楓の言葉に反応する変態が一人。

「シャ . . . . シャワーだとー？」

「ほらそこ、興奮すんな」

俺が変態に指をさすと、自分の人差し指から少し血が流れていることに気づいた。

「おい、一稀そこ血出でんじゃねえか！」

遙斗は大げさだなあ。さつとさつきの戦闘、あるいは小枝にでも引っかけたのだろう。

「え？ ちょっと大丈夫？ 待つてて。私、絆創膏持つてるから」

楓が鞄からごそごそと絆創膏を取り出す。

「いや、大丈夫だつて

こんなものかすり傷だ。

「そんなこと言わないの。ほら、手だして」

「ここまでそれでいるのに断るのも気が引けてきた。俺は渋々手を出す。

「…………ん、もういいわよ」

「あ、ああ。ありがとな」

シンプルな絆創膏が貼られた指を凝視し、慣れない礼を述べる。顔で、よしと頷いた楓はまた先頭を歩いていく。その姿を眺めていると、遙斗が神妙な顔で話してきた。

「…………なあ一稀。お前と岩倉が話してるとき、たまに妙な疎外感が生まれるんだよなあ」

「…………氣のせいじゃねーかな」

遙斗のぼやきを気にせず、俺も楓の後を追つた。

見上げれば辺り一面夜空が目に映つていて。

周りに店がズラリと並べられている、いわゆる商店街に出た俺たちはそれぞれ帰路につこうとしていた。

「じや、私はここだから。じゃあね、一稀、及川」

「じやあな、楓」

「また明日なー、岩倉」

俺たちは各自別れの挨拶を言つ。俺も早く帰つて休みたい気分だ。

きつと夏穂が夕食作つて待つてるだろうし、早めに帰りたい。

「あ、明日の課題忘れんじゃないわよー」

姿が少し小さくなつた楓から聞こえてくる声。

「だつてよ、一稀」

「お、俺か、今のは。お前つていう可能性も」

俺じゃないと…………願いたい。

「お前以外いねーつての。俺はいつも課題やつてる」

「く…………」

課題なんて大っキライだよチクショー！

「あ、俺もそろそろだわ。じゃ、明日課題忘れんなよー」

分かってるよー。

「…………もし、いや、もしね。万が一課題忘れかけたとき  
は頼むよ、遙斗くん」

「忘れる気満々だる、お前ー。」

そ、そんなことなーいっす。

「じゃ、やつこいつ」とでー。」

ショタツ！

俺は遙斗の言葉を聞くまないと走り帰った。

## Episode 4 (前書き)

今回は物語にはあまり関係ありません。けど一応やつといった方がいいのかな、と思つたので、書きました。

「おかえりー、兄さん」

「おう、ただいまー」

家に帰つてダイニングに向かうドアを開けると、夕食のいい匂いと、夏穂が最近取り替えたばかりの木製ダイニングテーブルの椅子に座つて待つていた。

「それにしても今日は遅かつたね。どこ行つてたの？」  
今日はゾーンに行つたんだ、なんて言えば心配されるどいつもくなくなつてしまふから誤魔化さなければ。

「あ、ああ。ちょっと遙斗とゲーセンに行つてた」

「んー、そつか。ほら、はやく座つて座つて」

夏穂の言つままに俺はダイニングの椅子に座つた。

「いただきます」

俺に続き夏穂も、

「ん、いただきます」

今日の夕飯はカレーだつた。それにしてもさすが夏穂だ。よくできてる。

「んー、やっぱまーいなあ。そじうのファミレス以上の腕前だよ、夏穂は」

「お、おだても何もでないつて、兄さん」

おだてたわけじゃなく、本心からやつ思つているんだけどな。

「そういえば、今日お前は何してたんだ？」

「今日はね、友達の家にお邪魔してた。まあ、帰ってきてからはゲームしたり、テレビ見てたんだけどね」

「へえ、そうか」

それから黙々と一人とも食べ続けるが、気まずい空気は流れない。むしろ居心地のいい空気が流れている。やはり夕食の空気はこうでなくちゃ。

「あ、兄さん。これ食べ終わったら一緒にゲームしよ?」

夏穂がカレーにふうふうと息を吹きかけ、熱いのを冷まそうとしている。俺をゲームに誘つてきた。別に食べ終わってからは何の予定もなく暇だったのだ。どうせだから誘いに乗つておこう。

「やるよ。これから暇だし。 で、なんのゲームをするんだ?」

「それはね

それはRPGだった。なんでも今日発売されたばかりの超人気商品だとか。このゲームは現実で実在するモンスターをそつくりそのまま持つてきたりしい。

この時代の技術では仮想アバターを用いて意識をゲームの中に入り込ませるまでのものが完成している。このゲームもその技術を使っているみたいだ。

夕食を食べ終え、食器を下げ終わった夏穂がゲーム本体をテレビに接続し、スイッチを入れる。すると前面のテレビモニターに、タイトル画面が映し出された。

「なんつーか、グロそうな感じだなあ」

俺がタイトル画面を見た素直な感想を述べると、

「そんなんじゅないよ。このゲームはね、政府が国民にモンスターの恐ろしさを知つてもらうために作ったゲームらしいの。だからすごいリアルに作つてるらしいよ?」

「ふーん。なんつーかシビアだな・・・・・・・・よつこいしよつと」

そういうながら俺はソファに腰を下ろす。

「じゃ、兄さん。これがぶつて」

そういうつて差し出されたのは被り物(?)みたいなやつで、これをかぶつてスイッチを入れれば意識がゲームの中に入るらしい。かぶつた俺はサイズがピッタリだつたことに驚いた。

そのことに気がついたのか夏穂は口で説明してくれる。

「ふう、本当なら家族四人でやるはずだつたんだから。兄さんのがピッタリなのは当たり前つてこと」

へえ、そうだったのか。てことはこりにもし母さん、父さんがいたら一緒にやつていたのか。

「じゃ、スイッチ入れるね?」

俺は顔で頷く。

「三、二、一、はい!」

その瞬間、俺の意識はブラックアウトした。

「もほ・・・・・・」  
「は・・・・・・?

目を開けると辺り一面草原だった。風がなびく音がとても心地よく、地面の感触がなぜか気持ちいい。ここまでリアルに作るとは恐ろしい限りだ。

「んーと、ちょっと待つて

いつの間にか隣に戦士顔で立っていた夏穂が手に持っているガイドブックを読む。

「ここの中名前は……『草原』だつて

「そのまんまだな」

もうちょっとマシな名前は思いつかなかつたのか。

「ん・・・・・? ていうかどうして顔も身体もゲームの中なのに同じなんだ?」

今頃気づいたが、ゲームの中であるはずなのにリアルの身体とそつくりだ。

「それは私が全部セッティングしたんだよ。けっこう大変だつたんだから」

へえ。それは感謝しなければ。

「えーと、『この草原には低レベルのモンスターが多数出現します。最初は初期装備ですが、倒したモンスターの素材を鍛冶屋に持つて行けば上位の装備を作り出せます』だつてさ」

初期装備・・・・? 身体を見渡してみると、確かに腰に剣がささっている。他にどんなのがあるのかと頭上に浮かんでいるメニュー画面をタッチし、ステータスを表示させた。

レベル: 5

装備 : 『鎧びた剣』

攻撃力: 10

防御力: 5

敏捷性: 7

素早さ: 7

命中率: 8

回避率：10

知能：3

スキル：『索敵』

知能低すぎだろ。これってバカつてことじやないか。

自分のステータスに落胆した俺は、夏穂に「ま、まあ運が悪かったと思って、ね？」と慰められながらも森の中へと歩を進めた。

鬱蒼とした森の中を歩いていると、前方に粘着上の物体が現れた。『スライム』と頭上に表示されているのを見て、思わず「うわあ」という声を漏らす。

見ていてネチャネチャしているのがとにかく気持ち悪い。

「なあ、アレどうすんの？」

とりあえず、夏穂に聞いてみる。

「とりあえず初心者の兄さんはとにかく斬つて斬つて斬りまくるのがいいんじゃない？」

生憎だが、リアルの方では初心者じゃないけど。

だが、刀を使って戦うのは初めてなので、アドバイス通りにしておく。

「はあー、せいつ！ せいやつ！」

闇雲に振り回した刀は側面に一回、頭上から一回当たり、『スライム』はその姿を白い光と共に霧散させた。

「一回当たりはずいこじやない兄さん。…………といつて

もアレ、レベル2なんだけどさ」

なんなんだろうなこの気持ち。嬉しいのか虚しいのかよく分から  
ない。

「とりあえずここから一旦別行動にしよ。リアルに戻りたいときは  
メニューのログアウトボタン押したら戻れるから」

別行動か。とにかくレベルをあげることに専念しよう。

「ん、分かった。戻るときは一旦お前に声かけるわ」

「はーい」

そこから俺はレベルアップのため、遭遇したスライムをひたすら  
狩り続けた。

経験値は微々ながらも着々と溜められていき、今ではレベル8だ。

知らぬ間に森の深いところまできていた俺は、スライム以外のモ  
ンスターが前方にいることに索敵スキルの能力で気がついた。

危ない危ない。いきなり急襲されたらゲームオーバーだったかも  
しない。

茂みに身を隠してそのモンスターの名前を頭上のバーで確認する。

### 『レッドハウンド』

見た目は野生の犬で、その名の通り赤い体毛を持ち、今も飢えた  
獣のように獲物を鋭い目で探している。

・・・・・ってあれ？なんかデジヤヴなんんですけど。

よし、一回記憶を振り返つてみよう。

～振り返り中～

ああ、そうだ！　　昼間、ゾーンに一人と探索しにいったとき、俺が倒したモンスターだ。

名前も知らないで倒しちゃったけど、アレ雑魚モンスターだったのか。

ま、リアルで倒せたのだから、ゲームの中でも問題ないだろ？  
俺は、所詮雑魚、と思いながら右手に力を込める。  
こちらに気づいた《レッドハウンド》が昼間と同じように土を蹴  
つて襲いかかる。

だが、もう遅い。こつちはすでに充電完了だ！

右手が瞬時に紅蓮の炎に包み込まれ

るはずがなかつた。

あ、やべ。ここゲームの中じゃん。

次の瞬間バウバウ吠えられながらボコボコにされ、薄れしていく意  
識の中ゲームオーバーの血文字をみた気がした・・・・・。

「「おわああああああ！」

ゲームオーバーになつた俺はどうやら自動的にリアルへ戻つてき  
たようだつた。

被つているものをソファーに置いて、精神を落ち着かせる。確かに、  
ハウハウ吠える犬にボコボコにされたんだっけ。・・・トライマに  
なりそуд・・・・・。

見ると夏穂はソファーに頭を乗せながらまだゲームの世界に入っ  
ている。今頃どこかの強モンスターとでも戦つてゐるのだろう。

「・・・・・とりあえず緑茶でも飲もう」

今は頭を落ち着かせたい。そう思い、ダイニングに足を運ぶ。

冷蔵庫の中に保存してあつたペットボトルを一気に飲み干す。

ゴクッ ゴクッ

「ふはあ！ あー、生き返つた」

かつてない程の爽快感が身体を襲う。正直緑茶をここまで美味しい  
と思ったのは初めてだ。

さつぱりとした爽快感に浸つてゐると、横から声が聞こえてきた。

「ちよつと兄さん、なに死んでるのよー。」

いつの間にかこっちに戻つてきいたらしく。夏穂はソファの上に頭を乗せながら信じられないといった口調で物を言つてくれる。

「お、戻つてきたのか夏穂」

「戻つてきたのか、じゃないわよ！ あんな森の雑魚モンスターなんかじゃ普通絶対死がないのに . . . . . 」

それは違つんじゃないだろうか。実際、俺が死んでるわけだし。

「いやいや、違うんだって。あの森の奥にさ、レッドハウンドっていう強いモンスターが潜んでたんだって」

その名前を聞いた途端に顔を下に向け、呆れたような口調になつた。

「 . . . . レベル15以上になつてから挑みましょうってガイドブックに書いてあつたのみなかつたの兄さん . . . . . 」

どうやら勝敗は最初から決まつていたようだ。

## Episode 4 (後書き)

次回からはこの物語の本筋に戻ります。

## Episode 5 (前書き)

ついにストーリーが進みました！

## Episode 5

次の日の放課後

「天江。俺はな、お前のためを思つて言つてるんだ。宿題を出せ  
現在、職員室で俺は目の前にいる『醤油』こと阿野勇作に説教  
という名の脅しをされている。題材は出していない課題のことだ。  
だが俺だってやっていいわけじゃない。

「いや、先生の教科はキチンと出しているじゃないですか  
そう、この教師の出す課題だけは出している。じゃないと殺され  
てしまうからだ（精神的に）。

「俺が言つてるのは他の教科のことだ！　お前は何一つ出してな  
いそうじゃないか」

事実ではある。基本的に俺は課題が面倒だからほとんどは未提出  
だ。教師陣も俺には諦めているらしい。

「確かにそうです。けどね、俺にだって譲れないものがあるんで  
す」

「うそ、俺にも譲れないものがある。

「ほう……それはなんだ？」

醤油が腰掛けている椅子がギシ、と音を立てる。

まだか？　と言ひたげな醤油に迫力を覚え、一瞬肩が震えて、言  
葉を言ひのを躊躇つ。

「それは

「頑張れ！　俺！　信念を貫き通すんだ！」

「それは？」

醤油が繰り返して尋ねてくる。

「それは

「

さあ！　あと一息！

「ゲームのための時間です！」

職員室の空気が止まつた瞬間だった。

ひどいめにあった。あれからというもの俺は別室に連れられ、今まで説教をくらつていた。なんなんだよ、正直に言つただけじゃないか。あそこまで怒ることもないだろ？！。どうも説教の時間が長すぎて遙斗や楓はもう帰つてしまつたようだ。今日はどうやら一人で帰ることになりそうだ。俺の足は教室で帰る準備をしたあと、玄関に向かう。

「…………ん？ なんだこれ？」

靴箱を開けると、なにやら手紙が入つている。

これはもしや…………

淡い期待を胸に寄せつつ、シールが貼られている封をとる。

『今日の放課後、いつでもいいので屋上にきてくれませんか？  
待つてます

天江一稀さんへ』

中にはそつ書かれた便箋が一枚。ついに俺にも青春の予感がきたよ。

だが相手の名前がないのが少し気にかかるな。これで男性ってオチだつたら嫌だよ俺。きっと焦つてて書き忘れてしまつたんだろう。

そう思いたい。

いつでもいいと書いてあるのだ。せっかくだし、今行こうじゃないか。屋上でずっと待たせるのも悪い気がする。

俺は屋上に向かう自分の足が少し早足になつているのを感じた。

## ギイツ

扉を開ける。緊張が高まつてしまふ。

開けた途端に風が目に入つてしまい、一瞬目を瞑る。

「あなたが . . . 天江くん」

目を開くと、そこには今まで見た中でも群を抜く美少女が立つていた。

「初めまして」

「はあ」

改めて見てみる。黒髪のセミロング。整つた顔立ち。豊満とまではいかない少し控えめな胸。スラリと伸びている足。まさしく美少女だ。

「といつても隣のクラスだから初めましてじゃないかもね。もしかしたら一回会つてるかも」

「ええええええええええええ！」隣のクラス！？こんな美少

女クラスがいたなんて！俺の目は節穴か . . .

「 . . . その顔じゃあ私が同学年だったつていうことも知らないみたいね。 . . . はあ」

俺はどれだけ隣のクラスを見ていなかつたのだ。ここまで人の目を引く容姿をしているのに今まで気がつかなかつたなんて。

「私の名前は岩崎奏。单刀直入に言つわ、私のチームに入つて欲しいの」

・・・・・は？

「あなたの能力のことは知ってるわ。ぜひそれを私たちのところに活用してほしいの」

「なに？ なんでバレた？ この学校で平和な学生生活をするため口外したことは一度もないはずだ。」

「…………ど、どこで俺のことを知った？」

「うちのチームに入れたいと思つたのは昨日。善は急げってね」  
昨日といえば俺が森の中で能力を使った日だ。もしや監視してたのか？

「元々能力者の気配させてたから、いつかはこいつやって誘つてたの。けど昨日のを見て、ね」

「どうやら気配こそしなかつたが、昨日のことは全部見られていたらしい。俺の能力のことも全部。」

「そ、そうかよ。確かに俺はお前らの言うところの『能力』が使える。だが、えーと、岩崎さんとやら、お前はどうなんだ？ 能力が使えるのか？」

「私？ ええ、使えるわよ」

「…………ここで使えないことを疑つてもしょうがない。ひとまずは信じることにしておこう。」

岩崎は屋上のフェンスに寄りかかりながら説明を始めた。  
「…………この能力はね、世界革命の大惨事によつて私たちの眠つていた才能が目覚めた結果なんだって」

岩崎がいつた大惨事とは、『怪物の行進』のことだろう。あのことは鮮明に頭の中に残つてゐるが、正直あまり思い出しあたくない。

「あのとき、家族を助けたい、生き延びたい、愛する人を失いたくない、それぞれがそう思つたはず。その思いに呼応するように生まれたのがこの能力らしいの」

「…………衝撃の展開だ。愛の告白ではなく、まさか自分の能力の起源を知ることになるとは。」

「能力を手に入れた私たちは、次第に集まつていった。それが私たち『黒い絆』よ。といつてもそれが総本部で、下に何個も組織が

あるんだけどね。私の入ってるチームもその中の一つよ。名前は

『暁の彗星』

「はは、やけに中一病っぽい名前だな」

こんな状況でも笑いがこみ上げてくる俺は可笑しいのだろうか。

「しあわせがないじゃない。ウチの隊長がそういう人なんだから」「なんか興味わいてきた。今度会つてみたいな。だがそれは入隊と同義だ。少し頭を落ち着かせろ、俺。」

「俺もホント何がなんだかよく分からんんだ。整理させるためにもとりあえず時間くれ。一日、一日でいいから」

岩崎はその返答を予想していたかのように自分の言葉を並べた。

「まあ、そりゃそうよ。確かにこんな話いきなりされてもね。本当に一日でいいの？」

「明日までにはキチンと決めておくから」

「…………そう、分かった。明日放課後になつたらクラスに迎えに行くことにするわ」

一人あの後寂しく家に帰宅した俺はベッドに突っ伏していた。あの話はなんだつたのだろうか。俺なんかをチームに入れて何がしたいのだろう。いろんな疑問が頭を取り巻く。

悩んだ末、俺の出した答えは

。

## Episode 6 (前書き)

今回はちょっと短いかもしません。

翌日

学校での授業はほとんど耳に入つてこなかった。代わりに考えていたのは、昨日の岩崎の話だ。

单刀直入に言つわ、私たちのチームに入つて欲しいの。正直自分の中ではもう答えは決まつていて。考え方抜いて出したものだ。後悔はない。

キーン コーン カーン コーン

最後の授業終了のチャイムが鳴り、生徒の雑談話がちらほらと聞こえるようになる。

「あんた、今日どうしたの？ なんかずーっとボケッとしてるし俺にも周りと同じように楓から声がかかつてきた。だが、他と違うのは心配そうな口調をしていることだ。

「大丈夫だから。別に考え事してただけだし。ていうか心配されるほど俺の顔は呆けてたのか？」

自分としては確かに授業は聞いたことがないなかつたが、受ける姿勢だけはとつていたはずだ。

「そりやあもう。横からみたら丸わかりよ。もうなんか心ここにあらずつて感じだつたわ」

客観的にみた今日の俺はひどいようだつた。おかしいなあ、そこまで顔に出してはいなかつたはずだけど。

「おら、ホームルーム始めるぞー」

突如クラス全体に響いた声の主は、少し熱血が入つてゐるウチの担任だつた。辺りで雑談を交わしていた生徒が早々と席に着く。楓もまだ話したかつた様子だが、渋々といつ感じで席についた。

このホームルームが終わつたらまた岩崎といつ対面だ。今から心の準備をしておこう。

「起立！ 礼！ サヨーナラ！」

クラスに田直である山崎くんの野太い声が響いた。

さて、いよいよだ。昨日岩崎がクラスに迎えにくると言つてたが、掃除の邪魔になつてしまつから廊下で待つことにしよう。

俺は鞄を持つて、そそくさと教室を出る。

「ちよ、ちよつと待つて」

教室を出て行く俺を慌てたように呼び止める楓。つたぐ、なんだよ。

「あの、疲れてるんだつたら、気晴らしに街に出かけない？」

．．．．俺のことを心配してくれてるのか。心で少し鬱陶しく思つたのを取り消す。口づけの感謝も込めて、今度一緒に街に出

かけたときは駅前のケーキバイキングでも奢つてやろう。

「今日はちょっと用があるんだ。ゴメンな」

「……………。ま、まあ今度空いてる日があつたの言つて！ いつも付き合うからー。」

そ、そこまで強く言わなくても。そういうて階段を下りていく楓は、俺の気のせいかもしないが少し落ち込んでいるように見えた。

まあ楓のおかげで緊張がほぐれた。ありがとな。

俺は心でそう思い、廊下の壁に身体を寄せせる。もうそろそろ来るだろう。俺は気合いを入れるために、頬を。

「おいつ、一稀！ これは……………ビリーハーことだああああああああああああああああ！」

遥斗の怒声が廊下に轟いた。やかましいな、おい。今度はなんだよ。

「お前！ いつウチのクラスの岩崎さんと知り合いになつたんだ！ お前のようなぐーたらゲームーにあの方と接点があるとは思えない！ 一体どんな魔法を使つたんだ！」

ぐーたらゲームーとは失礼な。確かにゲームーは否定しないが、ぐーたらは否定するぞ。そんな俺の心の叫びを無視して遥斗は一方的に話しを続ける。

「さつき、お前とは仲がいいのかつて聞かれたんだ！ 女子ラン

キング四位の岩崎奏にだぞ！ まあ、白状しろ！」

胸ぐらを握すられながら答える。

「別に…………なにもないつて」

「嘘つけえ！！」

あー、うせつたい。確かに知り合いだといえばそうだが、昨日初めて会話した知り合いだぞ。それに知り合つたきつかけは常人には理解しがたいものだ。白状なんてできやしない。

俺がぐらんぐらん揺すられていると、問題の人物が隣のクラスからひょっこりと現れた。

「天江くん、遅くなつてごめんね。今掃除が終わつたとこだから  
ちょうどいいところに！ 助かつた！」

隣のクラスから出てきた岩崎はとことことこちらに走つてくる。  
少し大人びた印象を持っていたので、なんていうかギャップがすごい。

その姿を見た遙斗の手が緩む。抜け出すチャンスだつたんだが、  
岩崎に目を奪われた俺の身体は思うように動かない。

「ほら、行くわよ」

岩崎がぐいぐいと俺の手を引っ張る。

「ちよ、待てって」

俺は横目で後ろを振り返る。

そこには、信じられないものを見てしまつた、といつよつな顔を  
した遙斗が呆然と突つ立つっていた。

ギィツ

昨日と変わらずボロい音を出す屋上の扉を開いた。また風が目に  
入り、目を瞑る。ここはいつも風が強いな。

「ああて。あなたの答え、聞かせてもらひわよ」

岩崎がフェンスに寄りかかりながら言つ。

「わかつた」

頷いた俺は何故かたたずまいを直す。

「

チームに入らせてもらひつよ」

これが、俺の答えだ。

その答えを聞いた岩崎は田を締める。

「後悔はない？」

「これからも、するつもりはないさ」

リスクがあつたとしても、それを十分凌駕するメリットがあると思つ。

それに、俺はもしかしてこの転機を望んでいたのかもしれない。

その答えに満足した岩崎は一瞬田を瞑り「クと頷いた後、俺に笑顔を見せた。

「よつ」JN『暁の彗星』へ！ あなたを歓迎するわー！」



## Episode 7 (前書き)

夜中書いたからちょっと文章が見苦しくなってるかもしれません。

夕暮れ時。

「「」は・・・・?」

屋上で答えを出した俺がまず連れられたのは、部室棟の部屋の前だった。岩崎曰く、「まだ日も沈んでないから隊長が学校に残ってるの。せっかくだから会いに行きましょ」とのことだ。

昨日の会話でその『隊長』とやらは子供っぽいといふことが分かっている。……俺は会つてからどうこう反応をすればいいんだろう。

「「」は、平たくいうと私たち『暁の彗星』の本拠地よ。言つておくと、メンバーは全員この学校の生徒なの。集まるのが怪しまれないよ。名田上は一応部活になつてゐるわ。名前は『彗星部』」

「彗星部!?」

俺は素つ頓狂な声をあげた。メンバーが全員この学校の生徒ってことにも驚いたが、彗星部つてなんだよ!

「『地域住民、生徒が困つているとき、彗星の如く参上し、救いの手を差しのべる。』これが私たちの部活動よ。略して彗星部」

「へ、うさんくさすぎる……」

あまりに謎すぎるのだ。正直これで部活の申請が通るとほんとも思えない。

「よく部活申請が通つたな」

「私たちは悪くいえば政府の手先だもの。学校のお偉いさんは黙認しているってこと」

「学校に圧力加えたつてことか! 何気にすごいな、彗星部!」

俺はここに来るまで疑問だつたことを口にすらしたことした。

「そりいえば隊長つてどんな人なんだ?」

岩崎はどうやって答えるべきか考え込んでいる。

「んーとね、一言で言っちゃえば、マイペースな人ね」  
マイペースな人なのか。この壁一つ超えたところにいる隊長とやらにますます興味がわってきた。

「なんか興味わいてきた」

「ん。じゃあなんだし、もう開けるわね」

．．．ついに『隊長』に会うのか。緊張するな。

ガチャン

岩崎が木製の扉を開ける。

瞬間、俺の目に映つてきたのは

椅子に座りながら、無邪気にマンガを読む子供と、その隅でパソコン作業に没頭している大人びた女性だった。

小さい子供の方は、赤髪のポニー・テール。前髪のかかつた大きい猫のような目。マンガが面白かったのか無邪気に笑みを浮かべる口。中学生のような体型。

絶句する俺は、いつも通りといった表情の岩崎に疑問をいった。

「ここは…………中学校じゃないぞ！」

岩崎はこちらに顔を振り向かず、言慣れた感のある台詞をいつ。

「あの子は正真正銘の高校一年生よ」

驚きの新事実！

先輩だったのかよ！

「嘘つけ！ あれ絶対高校生じやないだろ」

「失礼なつ！」

俺が見たままの感想を述べると、批判の声がとんできた。

「まったく…………カナ、そいつが今日連れてくるつて言ってたやつかー？」

案の定、声も子供っぽいな。

「うん、そうよ」

カナ、とは恐らく岩崎のことを指しているのだろう。奏だから力ナ、か。今度これでからかつてやるうかな。

「アタシは一年の水野明梨。アタシのことは皆隊長って呼んでるからそれでいいよ。お前は、天江一稀だっけ？ カナ、会ってる？」

いや、せめて引き込む人材の名前くらいキチンと覚えておこうよ。

「あつてるわよ隊長」

楓がそう返す。

「うむ、お前の名前は今度から『ツキ』って呼ぶから

………………。俺は声を出せずに横の岩崎を見る。

「誰にでもこんな感じだから」

それに気づいたのか、岩崎は小さい声で俺に教えてくれた。その間にも隊長の話は続く。

「まあカナが見込んだんだ、今更チームに入るのを拒みはしないよ。てことでこれ書いてくれたら話が早いの」

そういうて「ゴソゴソ」と大きい机の引き出しの中から出したのは入部届だった。

「これは入隊の意思表明みたいなものよ。あんまり意味ないんだけどね」

俺は岩崎の説明を受け、とりあえずサインする。

ここまで喋つてないが、そろそろ聞きたいことがあった。

「隊長さん。本当のところ、ここでの活動内容ってなに？」

隊長は田をパチクリとしている。まだ教えてなかつたのかと言いたそうだ。

「まだカナから言られてなかつたの？ まあいいや。ここがやるのはモンスター討伐とか。他にもいろいろやるけど基本的にはそれがメインだよ。少ないメンバーも今日はたまたまそっちに行っちゃつてるし」

「隊長は向かわなくていいのか？」

「アタシ？ アタシは隊長だからな！ それは問題ナッシングだよツツキー！」

なんかまた俺のあだ名変わつてるし。それに向かわない理由が隊長失格だろ。

そう思つてると、パソコン作業に没頭してた女性が初めて声をあげた。

「今日はゲームをするために休んでるんですよ隊長ったら。初めて、私は同じく一年の渡来莉桜です。彗星部の主に会計をしています。以後お見知りおきを」

ずっと部屋に入つてから何も言わなかつたんて、てっきり無口な人かと思っていた。だが、どうもそういうことではないらしい。

「ど、どうも。初めまして、天江一稀です」

こちらの女性は見るからにしつかり者だ。黒髪と眼鏡が異様に似合つている女性で、印象的には清楚な感じを受けた。 . . . . .

隣の中学生のような隊長と同学年とは到底思えない。

「はい、もうこの件は終わり！ カナー、昨日のゲームの続きをようよ」

え、もう終わり？ 早くないですか？ 呼ばれた岩崎は「はいはい」とため息をつきながらも部屋の隅にあるテレビに向かつた。

「ちよ、隊長、俺の件もう終わり？」

「うん、そうだよ。だって話すこともうないじゃん。入部届は書いてくれたんだし、かといって今からじゅもつモンスター討伐は時間が遅い。てことで細かいことと、自己紹介は皆集まる明日にするよ。ほら、ツツキーも一緒にゲームやる?」

一いつちまで駆け寄ってきた隊長に腕を掴まれ、無理矢理テレビの前の椅子に座らせられた。別に呼んでくれれば行くっての。テレビに映し出されたタイトル画面を見て俺は思い出す。

## 『Blood of Last』

「お、これ、俺も持ってるゲームだ」

これは、妹と一緒に一昨日やったゲームだ。今でもあのトラウマは心に残ってるぞ。

「これね、『黒い絆』に所属してるチーム全部に配られたゲームよ。何故かウチの隊長がハマってしまったわけ」

岩崎が説明してくれる。こんなゲームになんでハマったんだろうな。政府も政府だよ。ゲームに予算かけるんだつたら俺の家の前にある壊れかけた街灯取り替えろっての。

「ツツキーも持つてたのか! ならツツキーも入れて三人でプレイしよう!」

いつのまにか俺もゲームすることになつてた! たしかにマイペースだなこの人! 周りの人間を自分のペースに呑ませる天才だよ!

かくして俺は入隊初日から何故かゲームをして遊んだのであった  
・ · · · ·

「ああー、疲れた」

学校を出ると、すっかりもう夜だ。あれからゲームの中にダブルし続けた俺たちは、時間がたつのを忘れて楽しんだ。俺にはめでたいことに新しくトライウマができてしまつたんだけどね。

「確かに疲れたわね。けど明日からはもっと疲れるわよ？」

一緒に学校をでた岩崎と、途中まで一緒に帰る。よし、少しからかつてみよう。

「まだ体験してないから分かんないなあ、カナちゃん」苦笑混じりにさつきまで隊長が呼んでたあだ名でからかつてみる。どんな反応を見せるかな。

「ちやん付けはやめてよ。他のメンバーは、奏つて呼んでるんだけどな。まあ、カナならいいわよ？」

ふむ、正直どちらでもいいんだけど。まあどうせならカナのままでいいや。

「じゃあ俺、カナって呼ぶことにするわ、お前のこと。その代わり俺の」とツッキーって呼んでくれてもいいぞ?」

「いや、それは遠慮しどく。…………まあ、カナって呼ばれるんだつたら私はあなたのこと一稀つて呼ぶわ」

なんだか互いに変な意地を張つてしまつたようだ。…………つと、もう家のすぐ近くまでできてしまった。時間が経つのは早いもんだな。

「はあ。じゃあ俺、家こっちだから。…………じゃあな、そしてこれからよろしく、カナ」

明日から俺はこいつの世話になつていくんだらう。  
親しみの感情を込めて、俺は力ナと呼んだ。恐らくこれからもその呼び方は変わらないのだろうな。

力ナは、クスリと笑つたかと思つと、こちらに手を差し出し握手を求めてきた。

「こちらこそ。これからもよろしくね、一稀」

俺は慣れない握手をして、彼女にしっかりと頷いた。

「ああ」

力ナ。初めて呼ぶその名は何故か胸を暖かくするものだった。

「ふうー、よく眞剣に授業を受けるもんだ」

隊長と会った次の日、俺はいつも通り愚痴を漏らしながら授業を受けている。

「そりゃあ、期末テストが近付いてくるからでしょ。誰だつて夏休みを補習で埋めたくないしね」

隣の席の楓が、理由を教えてくれる。期末テストが近いのは確かだ。

「あんたも今のうちにやつとかないとテストやばいかもよ。それとも鬼の補習を好きこのんで受けたいわけ?」

「んなわけあるか。俺のことはほっとけっての」

あの鬼教師の補習など恐ろしくて想像したくない。

それよりも、連日あつたことを昨日頭の中で整理してたからかなり眠い。

「まあいいや。今日は寝不足なんだ。放課後起こしてくれ。おやすみ」

「あんたねえ。今の私の話聞いてた? . . . . . つてもう寝てるし」

呆れながら嘆息している楓の姿が意識の落ちそうな俺の目に映った。

もつ・・・・・無理だ・・・・・

俺は襲いかかる眠気に身を任せた。

放課後になり、誰もいなくなつた教室の中、一つの声が聞こえてきた。

「…………ちよつと一稀。起きて、もつ放課後よ」

「岩倉。俺に任せてくれ。いい方法があるんだ。一発で起きるを誰かがなにか話してる。」

「やつてみて」

「うむ。俺の一撃必殺技、くらえ！」

なんだ？ 今話してるのは遥斗と楓か？ つーか今聞こえた一撃必殺ってなんだ？

瞬時、遥斗は大きく息を吸いこんだ。

「な、なんだアレは！？ あそこに落ちているのは…………エロ本！？ 一稀、起きろ！ 一大事だ！ エロ本があそこに転がってるぞ！ さあ一緒に取りに行こ！」「…………」

マジか！？ つてそんなバカな。

田を開けると、鳩尾をやらせたらしい変態が床に横たわっていた。どうやら自分の身が一大事になってしまったらしい。

「だ、大丈夫か！？」

だが意識を失っている変態は何も答えない。

「まったく…………変なこといつからよ」

「お、お前がやつたのか楓」

寒気が走る。

「大丈夫、それほどしてないから」

「別にエロ本くらいで…………惨すぎる」

楓は怒らせないようにしてよう。この遙斗をみたらそう思ってしまう。

楓との会話にはもっと氣を遣おうと俺が思っていた頃、突然扉が開いた。

「あのー…………稀はいますか？」

声の主はカナだった。きっと今日も迎えに来ててくれたのだらう。

「か、カナか」

その横で楓は何か考え込んでいる。

「あの人…………確か隣のクラスの…………岩崎さん。

……ねえ、あんた岩崎さんとどういう関係なの？」

俺に聞かれても、うーん、悩むところだ。チームの仲間？　いや、楓には通じない。

俺がうなつていると、カナが横から割って入ってきて答えてくれた。

「一稀とは一昨日知り合つたばかり。ただそれだけ。それ以上でもそれ以下でもないわ」

すっぱりと言い切るカナ。確かにそれだけだけど、もっと重大な部分が抜けてるだろ。

「うそつ！　じゃあなんで呼び捨てなのよー」

そんなところに引っかかるのか。特別意味なんてないんだけど……

「それは…………成り行き上…………稀、隊長を待たせてるから行かないと」

「隊長を待たせちゃつてると」

「楓一。俺ちよつとこの後用事あるから。それじゃつ！」

「このままだと面倒なことになりそうだ。俺は返事を聞かないまま、鞄を持って教室をでる。

「ちよつと！ ちゃんとしたワケ聞かせてよ！」

教室から聞こえてくる楓の声を無視して、俺は彗星部へ走った。

「よお。遅かったな、新入部員」

部室の扉を開けた俺を待っていたのは昨日の一人を入れて、五人のメンバーだった。

隊長は以前と同じ椅子に座りながらお菓子を食つていて、渡来さんはパソコンに向かい合っている。

他の三人は見かけたことのない顔だ。

俺に話しかけた男は茶色のさっぱりとした髪型で、タンクトップを着て週刊誌を読んでいた。

後の二人は女性で、一人は隅にあるベッドで、すうすうと寝ている。髪は肩までしかからない長さの白色で、印象でいうと可愛い形にしたような存在だ。

もう一人は地毛が分からぬが金髪でかなりの美少女。して何故か分からぬがメイド服。背は他の女性と同じくらいで、お茶を入れる姿が様になつてゐる。

「……カオスだ」

俺は率直な感想を述べた。だつてこの部室、端から見たら絶対力オスだよ。

「…………これから俺もカオスの一員となるのか。なんか複雑な気分。

「確かにそうだけど口にしちゃダメ。みんなー、連れてきたわよー」

全員に声をかける。

「自己紹介、自己紹介」

力ナガが俺に小声で言つてくれる。けど自己紹介つて何を言えばいいんだろう。

「初めまして。天江一稀です。好きな物はゲーム。嫌いなものは学校の課題です」

とりあえず自分の名前、好きな物と嫌いな物を言つてみた。他になにを言えばいいんだろう。自分の能力のことか？

そう思つてると、他の人物からも自己紹介の声があがつてきた。

「俺は一年の井上大河だ。好きなものは隊長。嫌いなものは特にないな」

好きなものが隊長つてなんだよ！ ロリコンか！？ お前はロリコンなのか！？

だが、皆それがいつもの光景といった風だ。……俺がおかしいのか？ 否、そんなはずない。

俺が一人戸惑つてる中、自己紹介は続いていく。

「私は一年の逢原瑞月です。見てのとおりメイドをしてます。好きな物はお茶。嫌いな物はありません」

淡々といった口調。ていうかなぜメイド？ 普通お偉いさんの屋敷とかに住んでるものじゃないの？

「わたしは一年の稻村結衣です。好きなことは寝ることです。これからよろしくお願ひしますー」

次に自己紹介したのはさつきソファーで寝ていた子だ。ペニ、と頭を下げる。

「アタシ達のことは知ってるから別にいいとして。自己紹介も終わつたんだし、今日の予定は新人研修も兼ねてちよつとしたモンスター討伐に向かつてもらおうかな」

自己紹介が終わつたとたんに隊長から指令が下された。入隊一日にして討伐か。もつとなんか訓練とかあるのかと思つてた。

「イノちゃん！ 結衣ちゃん！ 君たち一人にはツツキーと一緒に向かつてもらひーー」

「はい、隊長ー！」

「むにゅむにゅ…………まだ眠気がとれないよつ…………」

イノちゃんて。俺のツツキーと似たり寄つたりだな。

一人の反応はそれぞれだ。井上なんかは敬礼していく、稻村は手をこすりつつも頷いてくれている。どうやら同行してくれるようだ。

「じゃあねえ、今回はこれに行つてもらおつかな。《メタルベア一体討伐》ツツキーも頑張つてねーー」

モンスター討伐初めてだというのに頑張れというんですか。さすがに無茶ですって。

みると、タンクトップだつた井上はすでに上着を着て準備を整えていた。稻村も眠そうな目で、準備を整えている。

「はい、認証完了！ いつでもいってらっしゃーー」

ニヤニヤと何故か隊長は笑つている。よく分からないなあ。

「一稀、頑つてきてね。隊長とゲームして待つてるから」

「まあ、努力はするけど…………」

笑顔で見送つてくれる力ナに頷く。

「天江。このドアの前で待つてろ」

井上に言われて部屋の隅に置かれている少し古ぼけたドアの前に立つた。いつたいこれは何なのだろう？

そう首をかしげていると、近くにいた逢原が教えてくれた。

「これは俗に言つ『瞬間移動装置』です。ドアを開けた先には指定された空間が広がっています。といつても、転移できるのはモンスターがいる地域だけなのですが」

す、すごい！ そこまで科学が進歩していたとは！

「それにしても・・・世界にこんな未知の利器があるとは」かなり驚いた。実際普通に暮らしていたら存在すら知らなかつただろう。

「よし、準備が整つた。お前は準備できたか？」

井上の準備ができたようだ。

「いや、元々なんとしてるよつなものだし」

「稻村は？」

「できたよー」

どうやら稻村も準備が終わつたようだ。

三人並んでドアの前に立つ。

「よし、行くぞ！」

井上がかけ声と同時にドアノブをまわした。ドアの内部は水面上に光で覆われている。

慣れた感じに二人がドアの内部に飛び込む。

一人が飛び込み姿が見えなくなつたころ、一人深呼吸をして俺も光の中へダイブした。

う……これは……どうだ?

ドアに飛び込んだ俺は、意識を失っていたらしい。

「お目覚めか? 天江」

頭上から声がふつってきた。見上げると井上が俺を立っている。いつたいこには……?

木々で覆われた視界。印象でいうと、密林だ。

「ここは有り体にいうとゾーンの中の森だ。お前が立ち入った場所より深いところにいる」

あの森をまっすぐ行くところになるのか。といつても不気味なのは以前と変わらずなのだが。

「おーい、結衣ー。天江が起きたぞー」

小走りで稻村がこっちにくる。どうやら今回のターゲットである『メタルベア』を探していたようだ。

「あっちには見た感じいなかつたよー」

「そうか。じゃあ次こっちだな」

そういうつて井上は稻村が走ってきた方向とは逆方向へどんどん歩いて行く。

「天江くん、行こ?」

愛くるしい声で、今だ立ち上がりていなかつた俺に手を差し伸べてきた。なんていい子なんや……

俺は目尻に涙を浮かばせながら稻村の手をとり、井上を追いかけた。

よく分からぬが、三十分は歩いたか。そんなときだつた。

「 静かに」

井上の声がさつきとは違ひ真剣なものになる。

その真意を聞けないうちに俺は井上と稻村に茂みへと引っ張られた。

いつたいなにが . . . . .

体勢を立て直すと、井上が「あれを見ろ」と指をさしていた。

その指のさす方向をみてみる。

そこには灰色の毛並みをしてる人の一倍はありそつた熊が仁王立ちしていた。

. . . . . 威圧感ハンパないわ、あの熊さん。百戦錬磨の熊さんだよ、あれ。

「あれが『メタルベア』だ。ていうか絶対大きな声出すなよ。それといつでも戦闘できる状態になつとけ」

俺は言葉に従い、右手に力を込めた。 . . . . . よし、準備完了だ。

「天江はここに残つてくれ。つうか残れ。お前を戦わせたら俺が怒られちまう。お前のせいで隊長に嫌われるのは絶対御免だ。」

まあ、妥当な判断だらうな。討伐一回目の俺はお荷物にしかならないし。

「おい、結衣。準備もうできたか?」

「うん、できたよー」

稻村には緊張の色がみられない。場慣れしているのか、抜けた性格なだけなのか。

「じゃ、いつてくるわ。絶対手だすなよ」

「いつてくるね、天江くん」

そういうて立ち上がった二人はとても頼もしくみえた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

駆けだした俺たちを待ち構えていたようにメタルベアは咆吼した。

「結衣！ 剣くれ！」

「ん、これ！」

これでも命をかける戦いだ。必然的に俺も結衣も声が大きくなる。結衣がいつも忍ばせている短剣を走りながら受け取る。

俺はその短剣に電気を走らせた。これは俺の能力だ。体力が続く限り電気を操ることができた。

メタルベアが仁王立ちでこちらの様子を伺っている。今ならチャンスだ。

「うるあつ！」

ガキン！

剣の鈍い音が辺りに響いた。

くそつ、やっぱり皮膚が硬い。一回戦つたことがあるがやはり剣では無理か。ならこれでどうだ！

「結衣！ 後ろに下がれ！」

結衣に距離をとるよう伝え、自分も距離をとる。

メタルベアの爪の間合いに入らないところまでいき、手の中に電気を集束させる。

次第に俺の手に電流が漏れ始めた。完了だ。

だが、相手もこれを察知してかその凶器ともいえる爪を振り回し

ながら、こちらに突進してくる。

「ガアッ！」

瞬時、団体の割に俊敏だった動きが鈍くなつた。

結衣がメタルベアの足に剣を投擲したのだ。この機を見逃すわけにはいかない。

俺はよろけたメタルベアの元へ駆けだし、電撃に包まれた拳を繰り出した。

સુધીની પત્રી

放った拳は相手の腹に当たつた。巨大な熊が音を立てて、地面に

何者か七十九

手で額の汗を拭う。して、俺は絹衣は憎我をしてないか聞くため後ろを向いた。

だが、心していなかったよ。ついでに、心していなかったよ。

「井上くん！ 後ろ！」

つんざくよつの悲鳴が耳を突き抜けた。嫌な予感がして後ろへ振り向く。

耳を塞ぎたくなるほど呴き声が森中に響き渡った。

どどめをさせてなかつたのか！ くそつ！

だが、メタルベアは俺へではなく、別の場所へ突進していく。

その方向は  
天江！

天江！

やべえ！！

二人の戦いが終わつたようだ。ふう、恐ろしい熊さんだつた。いや、それにもすこかつたな。たつた数分だつたが、やつぱり次元が違う。後で「お勤め」苦勞様です！」て言って差し入れでも出そうかな。

俺が戦闘が終わつたことに喜んでいると、

とてつもない咆吼が耳に聞こえてきた。

え？ なに？ まだ生きてんの？  
よひけながらも立ち上がった熊がものすごい速さで一歩間に突進  
していく！

今度は仁王立ちじやないぶん速度が上がってるようだ。あの一人も突然のことだつたらしく助ける手立てがないように見える。

や、ちが、どうやつてこの状況を打破すればいいんだ？

が溢れる。

瞬時、熊の全身が炎に包まれ、燃え盛つたまま地面へ倒れ込んだ。

次に俺が見たのは、遠くで啞然とした表情を浮かべる井上と稻村の姿だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9177z/>

---

World Revolution!

2012年1月8日21時52分発行